野尻抱影先生追悼

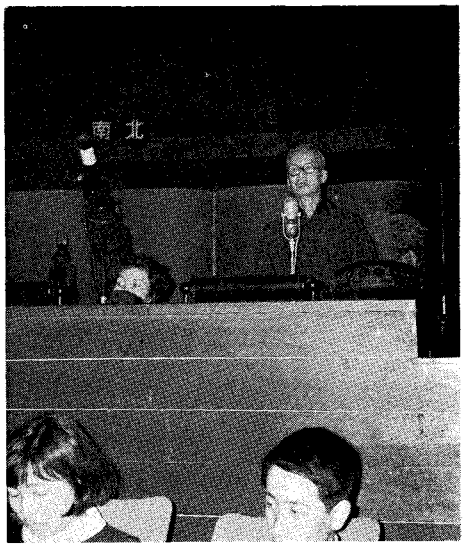
原　　恵*

「ぼくは“オリオン霊園”というのを，もうちゃんと指定しているんですよ.」(NHK テレビ 1977 年 2 月 5 日放送の対談で)「ぼくはね，オリオン座の右はじに墓所をきめてあるんですよ.そこにはアマゾンの魅力的女兵が，丸い盾をもって墓守りをしてくれる手はずにもなっている.（注. γ Ori ベラトリックスの固有名は「女兵」の意味）ぼくは冥王星の名付け親だから，冥王居士とでもして……」(雑誌『ポエカ』1976 年夏号の対談で)

これは野尻抱影先生が近年よく語られたお得意の冗談であったが，その野尻先生は，奇しくもベラトリックスの南中する 1977 年 10 月 30 日午前 2 時 45 分，ついにオリオン霊園の客となられた．明治 18 年（1885）から 92 年の長きにわたる自らの生涯を「星の美と神秘に憑かれて，吾から身を焼いた燈(ひ)取り蛾の短夜(みじかよ)の一生」(『星・古典好日』1977 の序文から，ルビ筆者）と記された先生の，そもそもの星との出会いが，神奈川県立一中（横浜）の生徒のころ友人から教えられたオリオン座であったという．早大英文科に進まれた先生は，そこでラフカディオ・ハーン（小泉八雲，(1850-1904)）や坪内逍遙博士 (1859-1935) の講義を聞き，ギリシア神話の研究から星座との関連に新しい興味をかき立てられ，相馬御風 (1883-1950) や会津八一 (1881-1956) などの学友たちの間に天文趣味を鼓吹されたという．明治 39 年（1906）卒業後，しばらく星の美しい山峡の地・甲府中学で，また大正元年（1912）から東京の麻布中学で，前後十数年間を英語教員として過ごされた先生は，大正 7 年（1918）語学出版で知られる研究社に入社され，語学書，注解書，各種辞典類，英語教育雑誌等の編集に従事，のちには編集部長の重責をになわれ，戦前の英語教育の興隆期に同社の支柱として活躍，また戦時中母校早大で神話学の講師をされたことは，天文関係者にはあまり知られていない．

“星の研究家”としての野尻抱影の活動は，ちょうどこの時代から爛漫と花開いてくる．われわれの年代前後の多くの天文ファンが，先生の『星座巡礼』(1925) 以降の著作や『科学画報』『子供の科学』等への寄稿，また東京中央放送局 (JOAK) からの星のお話などによって育てられたばかりでなく，その中から少からぬ数のプロ天文学者も輩出している．

1976 年，日本天文学会は野尻先生に対し「神田賞」を贈ってその長年にわたる天文学の普及に対する功をたたえたが，先生の語られる天文学はいつも豊かなロマンに



昭和 50 年 5 月五島プラネタリウムの星の会一般クラスで「星に感じる畏怖」と題して講演する野尻先生

裏づけられ，他の人の及ばない独特の雰囲気を持っていたからこそ，広い読者層を得たのであろう．先生のこの方面における執筆態度は，次の文によく示されている．

「わたしは時々誘はれて科学者のしりへに附き，物も書けば講演を試みることもあります．しかし元来が文学専攻であるところから，天文文学の巣をかまへて，そこから星の美を味ふ喜びを同好の人々に頒ち，その慰めを悩める人々や病める人々に贈ることを永年の仕事として来ました．わたしの著書に天文学が顔を出すのも，知識の為めに知識を伝へるのが目的でなく，それらに自分一流の実感を持っていて，星の美や驚異を強調するに役立てているのだと信じじてゐます.」(原文のまま，『新星座めぐり』，1946 の序文から)

まことに自らをよく知る人の言葉であるが，先生は昭和初年に全集本『宝島』の翻訳で得られた稿料で日本光学の 10 cm 屈折望遠鏡を購入されて自らの目でいろいろの天体を観望され，その書かれる天文学の知識はつねに新しくて正確であったことは特筆すべきで，そのためいつも新しい資料の入手に努力しておられ，しかも上掲の文にあるようにそれらに実感を添えて伝えることに心を砕いておられたと思う．昭和 13 年（1937）に開設された有楽町の東日天文館のプラネタリウムが，昭和 20 年 (1945) 5 月の空襲で焼失したことを非常に残念がっておられた先生は，昭和 32 年（1957），ちょうど最初の人工

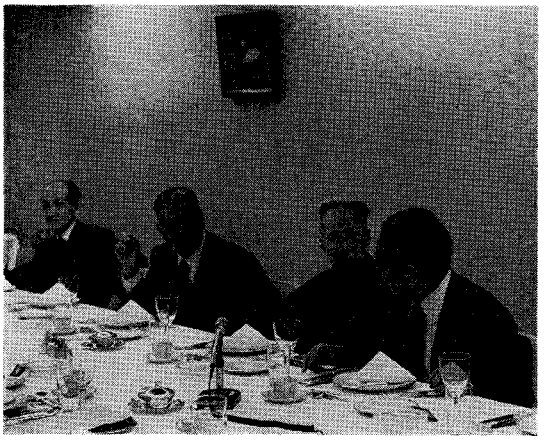
* 青山学院大

衛星の成功の半年前，東京渋谷に天文博物館五島プラネタリウムが開設されたことをたいへん喜ばれ，以来同館の理事と学芸委員をつとめられ，特に当初は親身の指導をされた．学芸委員会では先生は最年長の，筆者は最若輩の委員として，ほとんど毎月ご同席の機会を得ていたが，提示された解説原案が理論に流れようとするとき，先生は社会教育機関としてのプラネタリウムの本質をふまえて，星の美と神秘の実感を伝えるのを忘れぬよう，注意をうながされた．そんな時の先生の発言にはお年を感じさせない情熱が溢れていたことを，なつかしく思い起こす．

星の随筆家や，海賊談や怪盗談等の興味ある本の著者としての先生については，ここでは措かせていただくとしても，東西の文学に現われた星の研究と，星の日本名の収集については，ぜひ記しておかねばならない．前者は先生の文学者としての専門的研究で，その成果は戦前に月刊誌『英語青年』(研究社) に連載の「英詩に現れた星」にはじまり，『星と東西文学』(1940) できわめてユニークな研究書として一応まとめられた．その後ながく，先生（のみならず日本では誰も）はこの分野の本を書かれなかったが，90 歳の賀を迎えられる直前（本誌 1976 年 3 月号 89 ページ参照），ギリシア，ラテン，中国，インド，英国等の古典文学に散在する星に関連のある詩文をたんねんに集めて注解した大作『星・古典好日』(1977, 恒星社）を脱稿された．これは先生の書きおろしとしての最後の著書となったが，同時に先生のマグヌム・オプス(最大著) であると思われる．私事にわたるが，同書の校正その他をお手伝いさせて頂き，この仕事を通じて 90 歳のご老齢にも少しも衰えぬ学者・野尻抱影の良心と熱意にじかに触れることができたことは，実に何物にも替えられない経験であった．

星の日本名収集は，いわば先生のライフ・ワークで，この仕事だけでも野尻抱影の名は不朽である．新村出博士 (1876-1967) の『南蛮更紗』(1925) 中の星の日本名の断片的紹介と考証に触発され，以来半世紀にわたって続いた野尻先生の，全国各地に伝えられる星の日本名収集とその考証はまさに先生の独壇場で，多くの協力者を得て戦時中の『日本の星』(1940, 研究社) で一応まとめられたが，戦後公職を退かれてからもいっそう拡充して『日本の星』(1957, 中央公論社）となり，さらに完全に分類整理し，しかも報告者の通報文という貴重な一次史料まで書き添えた『日本星名辞典』(1974, 東京堂) で完成を見た．急速に進行する都市化の波に洗われて，放置すればすべて全く失なわれる寸前であったローカル色豊かな星の日本名は，先生によってほとんどすべて記録として残されたわけで，実に貴重な，かけがえのない業績である．

さて，冒頭ご紹介した先生の談話のように，野尻先生は冥王星の訳名の発案者であった．1930 年 1 月末，写真乾板上で米国ローウェル天文台のトンボー (1906-) が発見した新天体は，なくなった創立者パーシヴァル・ローウェル (1855-1916) がその存在を予告していた超海王星にあたるとして，ローウェルの誕生日でしかも天王星発見の満 150 周年記念日にもあたる 1930 年 3 月 13 日に公表された．同天文台では多くの新惑星命名提案のうちから，英国の 11 歳の少女ヴェニシア・バーニーの「プルートー」を採用した．これは，この惑星が太陽系の外縁部の暗黒界を動いていることから，地下の国（死者の国，日本で言えば冥土）の王としてのプルートーの名が与えられたもので，海の領域の王のネプトゥヌスの名による海王星ともつり合いがよい．



昭和 50 年 11 月 30 日，満 90 歳のお祝い

野尻先生はこのプルートーの名を「冥王星」と訳すことを着想されて，早くも同年 10 月号の『科学画報』(新光社，現在の誠文堂新光社の前身の一つ）で提案された．原名，訳名とも天文学者によるものでないのも興味深いが，この訳名には京大の山本一清博士 (1889-1959) が賛意を表され，同氏の主宰した東亜天文協会（のちの同学会）では間もなく全面的に採用され，一般社会にも普及し，また中国でもこの名を逆輸入（天王星，海王星も中国訳）して使い始めた．しかし東京天文台系ではこの一民間天文家の提案に冷淡でその後十余年「プルートー」で通し，戦時中の 1943 年ごろ日本学術会議の名で制定された術語集でようやく認められたと記憶する．ところが，戦後は今度は当用漢字に「冥」の字がなく，今日の教科書等には「めい王星」という表記で，先生ご苦心の名訳も原意不明に陥っているのは，これまた残念である．

そのほか，語るべきことはあまりに多いが，すでに紙数も尽きている．

野尻先生の霊，とこしえにオリオン霊園に安らいたまわらんことを祈りつつ，この意をつくさぬ追悼文の筆をおかせていただきたい．